

新青陵会員の抱負



「新米記者、勉強中」

空知新聞社 記者
黒川 雄 星

「プレス空知」という新聞を発行する空知新聞社岩見沢支社で記者をしています。昨年八月末からインターンで仕事を始め、今年四月に入社。岩見沢市や美唄市を取材で駆け回る毎日を過ごしています。

香川県出身で、福原崇之准教授の下で学びたいと芸術・スポーツビジネス専攻に進学。在学中は北海道日本ハム球団主催試合でアンケート調査を行ったり、様々なサークル活動に励んだり、充実した四年間を過ごしました。特に自ら創設した芸能サークルの活動は思い出に残っています。私は幼少期から「釣亭黒鯛」の名で落語をやっており、大学でも続けたいと思っていました。

しかし、入学当初は知り合いのいない地域で、どうやって自分の活動を市民に知ってもらおうか悩んでいました。そんなある日、大学の駐車場で「プレス空知」と書かれた車を発見。自分のことを取材してもらいたい、と車の前で待ち伏せ、記者を突撃しました。自分の取り組みを記事にってもらって以降、有難いことに様々な人とつながり、各方面から

連絡をもらえるようになりました。終わってみると四年間で市内外合わせて五十公演を開催しました。現在、その記者が今の支社長、上司に当たります。不思議な縁だなあ、とつくづく思います。

インターンを含めると約一年記者をしています。学生時代の人脈が仕事に生きているのは本当に嬉しいです。目標は「岩見沢を発信すること」。(もちろん全ての取材を全力でやっていますが。) 前述の通り、私は記事にしてみました。前で、学生生活がガラリと変わりました。今度は私が、多彩な個性を持った岩見沢を地域に広げていきたいと強く思います。

また、記者は取材で色々な人に会うことができます。市長や社長、子どもからお年寄り…。仕事を通して見聞が広がります。地域のリアルな声を参考に、在学中に得た知識を展覧させ、いずれ地域創生に携わる事業をしたいとも考えています。記者として働きたい、自身をレベルアップさせていきます。

なお、落語の活動も続けていきます。本稿をお読みの方、出演依頼をお待ちしています(笑)。最後に「新聞記者」と掛けまして「ピザづくり」と解く。その心は…、どちらも発行(発酵)した記事(生地)をもっと広げたい!



「いつか、憧れの姿に」

むかわ町立舘川中央小学校
小林 岳 人

今年の三月に北海道教育大学岩見沢校スポーツ文化専攻を卒業し、四月から胆振管内にある舘川中央小学校で教諭として勤務しています。現在は、小学校三年生の担任として、子どもたちと楽しく毎日を過ごしています。

教諭という仕事は、厳しいこともたくさんありますが、それ以上に成長していく児童の姿を見ると、どこかやりがいを感じているところがあります。学級担任として、まだまだ未熟者ですが、三月まで児童の姿を見守り、行事や授業を通して様々な経験をさせてあげたいと考えているところです。

小学校の教諭を目指しはじめたのは、私が小学生だった時です。楽しそうに働く父の姿、また当時四年生だった私の担任の教諭の姿を見て、いつか私もこのような教諭になるというあこがれを抱いたのがきっかけです。働く環境の過酷さから他の職業を選択することも考えましたが、子どもと関わる一番の仕事だと思いい、教諭になることを決断しました。

私が通った小学校は、とても小さい学校で、通っていた時は、全校生徒二十三人の全学級複式の学校でし

た。全校縦割り班で食べる給食や全校レク、また運動会や、学校キャンプ、学芸会などの大きな行事などは、縦のつながりをよくするだけでなく、私に楽しい思い出を残してくれました。振り返ると、あの時の先生方には、たくさんご迷惑をお掛けしてききましたが、これもこれから一緒に働く教諭として恩返ししていくことができればと考えています。

四年後、私は、日高梓という採用枠のため、自身の地元で教諭をすることになります。今までお世話になった先生方と働くことができるということに期待感もありますが、同時に「初任者」という枠がはずれて、自分がやっていけるのかという不安もあります。この不安を払拭するためにも、しっかりと今働いている学校で経験を積み、頑張っていきたいと思えます。

最後に、私は今までたくさんの人に支えられてきました。家族をはじめ、大学の教授、今まで関わってくださった先生方、友人には本当に感謝しています。これからも周りの方々への感謝の気持ちを忘れることなく、その気持ちを児童に伝えられるよう、精進していきます。

退職支部長からのメッセージ



「岩教は家族です」
札幌支部
佐藤 達也

「岩教（がんきょう）」に通っていた時代のことは、断片的にしか覚えていないというのが正直なところで、四年間、汽車や車を使って札幌から通ったので通学だけに限っても結構な時間を費やしたはずなのに、覚えていることは車窓からの風景や帰りの汽車で仲間と飲んだことくらい。講義やレポート、ゼミのことはなおさらよく思い出せません。なぜなら私はかなり不真面目な学生だったからです。

くわしく書くと同窓会の会報の内容としてふさわしくありませんので割愛いたしますが、なにしろよく覚えていない、覚えているには恥ずかしいことばかりなので、体がそのように反応しているからでしょう。

細部は覚えてなくても学生時代の日々は、私自身の土台になっていることはまちがいありません。気のいい先輩と後輩たち、個性豊かで愛すべき同期の連中に恵まれた幸せな時間でした。

そして今、その青陵の仲間に加え

られ支部の舵取り役を任されている幸せを感じています。

同窓会活動に携わるようになったのは三十代半ばの仕事も家庭も一番忙しかったころです。同僚の先輩に声をかけられ支部の名簿作成のお手伝いから始めました。二千人を超える名簿の精査、異動の時期には各職場との確認連絡、印刷業者さんとの打ち合わせ、そして「早く名簿できないかなー」と催促の連続。「仕事もあるのにめんどくさいな」と、学生の時のような不真面目な気持ちもありました。

管理的な立場となり、仕事上の困りや悩みの質が大きく変わってきたときに、頼りになったのが同窓のつながりでした。岩教の仲間たちは昔と変わらず、打算もなく見返りも求めずに接してくれる、あたたかさを遣わせない家族みたいな存在です。職場でお互いが青陵と気づくとほとんどの方がにつこりします。時代は変わっても、人を笑顔にさせる岩教の校風を感じさせる瞬間です。これからも同窓の絆が変わらずにつなげていくことを願っています。



「多くの出会いに感謝」
小樽支部長
加藤 俊明

私が北海道教育大学に進学したと思ったのは中学校時代です。この頃、俳優の中村雅俊さんが教師役の学園ドラマがテレビで放送されていて、学校の先生って楽しそうと思っただことがきっかけでした。

昭和五十八年に岩見沢分校に入学し、算数・数学研究室（数研）に所属となりました。小樽から通学していたので、サークルなどには入れませんでした。講義では専門教科の難しさに直面しました。この時は高校で文系ではなく、理系に進めばよかったと後悔しました。当時の数研は全学スポ大では、打倒「体研」と気合を入れて先輩方が戦っていたことを今でも覚えています。

教員免許を取得し、昭和六十二年三月に無事に大学を卒業し、後志管内の島牧村の中学校で教員としてのスタートを切りました。教員採用試験は小学校での登録でしたが、中学校で採用となり戸惑いました。その後的一般教諭時代の十八年間は中学校で数学や社会を教えました。

中学校では部活動があり、自分が経験しているかどうかは関係なく顧問になり、野球部・卓球部・バレー

ボール部・バドミントン部を担当しました。卓球部以外は学生時代未経験の部活動で、いろいろな方に指導方法等を教えていただきました。

平成十七年に教頭となり、小樽市で勤務することになりました。当時、青陵会小樽支部は管理職の先生が多く、研修会も盛んに行われていました。講師に岩見沢から平川先生をお招きして毎月のように研修会を行っていました。平川先生からいただく資料は、最新の教育情報や管理職として必要なスキルアップに関する内容がぎゅぎゅと詰まっております。いい刺激を与えていただきました。

校長になって現在三校目ですが、これからの変化の激しい時代を生き抜かなければならない子どもたちに、夢や希望をもって生活するよう、機会あるごとに語りかけています。

数研の同期の仲間とは、コロナ前は年に一度岩見沢や札幌に集まり同窓会を開いていましたが、コロナ禍により中止に。現在はまた集まり始めています。昔の話をしたり、悩みを聞いてもらったりと、数研の仲間たちには本当に感謝しています。

最後になりますが、北海道教育大学青陵会のご発展と会員の皆様の今後益々のご活躍を願っております。



「必然と必要を感じて」
上川支部
石塚 睦

随分前のことですが、松下幸之助さんの「この世に起こることは全て必然で必要、そしてベストのタイミングで起こる。」という言葉に触れたことがあります。当時、まだ若かった私は、「そんなオカルトみたいなことがあるものか。」「未来は誰にも分からず、自分で切り拓くものだ。」と思っただけです。今でもほぼそう思っています。役職定年という人生の節目を目前にして、否応なしに自らの半生を振り返らなければならぬ状況になりますと、この言葉が頻りに脳裏をよぎり、改めて、その重みを考えさせられます。

岩見沢分校を卒業した私は、上川管内名寄市の小学校に新採用となりました。そこから上川管内で三十数年、全十校に勤務いたしました。たくさん子どもたちや同僚との出会いがあり、もちろん、青陵会上川支部の皆様との温かい交流も重ねてまいりました。子どもたちと過ごした色褪せない時間、同僚とともに取り組んだ教育実践、そして、上川支部の諸先輩からの御指導や御支援などが、今の私のアイデンティティを私たち作ってくれ、教職人生の道標と

なつたと思っています。

したがって、私が、ここ上川で生きていくことになり、たくさんのお会いがあったことを単なる偶然だと割り切ることは難しく、その全てに「必要」があったのだと振り返ることができません。つまり、松下幸之助さんが「必然で必要」の言葉に込めたのは、人生におけるどんな選択にも、どんな出会いにも必ず意味があり、それぞれが唯一無二の貴重なきごとであるとの思いだと理解しています。

さて、私事が長くなつてしまいましたが、当支部の現状について続きさせていただきます。青陵会上川支部は、OBを含め七十名を超える会員を有しておりますが、現在、校長は私一人、教頭は二人といった大変厳しい状況にあります。また、長く続いたコロナ禍の影響もあつて、会員相互の親交は、急速に希薄になつていくことを肌感じます。支部長としての私の任期もあと半年ほどであります。一人一人の支部会員に同窓会の「必要」を感じてもらい、先輩たちが紡いできた「必然」の絆をしつかりと後進に繋げていくことが、私の責務であります。今後とも青陵会上川支部への一層の御厚情と御支援をよろしくお願いいたします。



「心のよりどころ」
留萌支部
金山 茂 樹

生まれは札幌市豊平の現きたえーるすぐ近く、その後、また白石区だった厚別ひばりが丘で小学生まで過ごし、思春期は北広島市(当時広島町)で育ちました。豊平には市電の大きな終点駅があり、定山溪に通じる拠点でもありました。また、当時の厚別は新札幌副都心のかげらもなく、野犬軍団から悲鳴を上げて逃げながらプレハブ校舎の小学校に通学していました。

札幌の都心からどんどん西へ離れていきましたが、何度も通った月寒にドーム球場ができてプロ野球のフランチヤイズが実現するなど想像すらできず、まして原生林を伐採した分譲宅地がひしめくキタヒロにポールパークができるとは驚きしかありません。時のながれを感じます。

大学進学した岩見沢は、今でも留萌管内から自宅札幌へ帰る際にたまたま通りますが、学生時代のころを彷彿させる佇まいは健在ですね。大学の校舎も住んでいたアパートもそのまま懐かしい風情が気持ちと和ませてくれます。

岩見沢校では硬式野球部に所属してきたおかげで、留萌管内に赴任した中学校では、迷わず野球部の指導に

情熱を燃やすことができました。その中でたくさんの方との出会いや切磋琢磨した経験は私自身の大切な財産となっております。管理職となつてから、そのエネルギーは「息子の高校野球おっかけ」に代わりました。引越し・転校の繰り返しで迷惑をかけ続けてしまった家族には感謝いたします。

留萌管内では、赴任した先々の学校で優秀な教職員に恵まれ、充実した教育活動の中で努めることができました。ここ数年は、教科担任として社会科の授業も受けもつことができ、子どもたちとともに学ぶ楽しさを分かち合っています。一般教員時代とは違う「ベテランの味わい」を武器に、「先生の授業おもしろい」と言われる満足感や子どもたちが理解と考察を深めた瞬間の指導者としての達成感は格別です。こうした生の経験は若い教員に実感的に伝えることができました。

退職後は、これまで支えてくれた家族に恩返しするとともに、全く違った仕事をやってみたくも感じています。岩見沢、留萌はこれからも私のかげがえのない「心のよりどころ」として大切にしたいと思えます。



「雄大な
日高山脈とともに」
日高支部
品田 和輝

何も連絡がなく、先行き不安を感じていた三月も下旬、「〇〇日に、日高教育局に来てください。」と待望の連絡があり、早速、地図を広げて所在地を探したり、交通機関等を確認したりしたことが昨日のこのように思い出されます。あれから三十六年の月日が流れました。

私の初任地は、雄大な日高山脈と太平洋に囲まれ、四季折々の美しい風景が広がる、また、夏は涼しく、冬は比較的暖かく雪が少ない、穏やかな気候風土である浦河町の堺町小学校でした。児童数が五百人を超える大規模校で、毎年、公開研究会を開催するような自他ともに認める管内一の研究校でした。ここでは、多くの先輩方からの叱咤激励を受けながら、教員としての基礎・基本を徹底的に叩き込まれた、そんな五年間を過ごしました。

一般教員から教頭、そして、校長へと立場が変わっても、ぶれることなく「研修は学校の生命線」という意識を強くもち続けることができたのは、初任校時代の経験があったからこそと自らの運のよさを実感しているところからです。

その後、一般教員として二校、教頭として四校、そして、現在校長として四校目となります。現任校は二年目で浦河町立堺町小学校。そうです、校長として、教員生活最後の学校として初任校に戻ってきました。本校は「学校力向上に関する総合実践事業中核校」「地域連携研修主体校」の指定を受け、管内への実践事例の発信や公開研究会の開催等に向けて、三十数年前と変わらず、管内の研究発信校としての自負をもって取組を進めています。そんな中で、教員生活を全うできることを大変幸せに感じているところです。

日高青陵会との出会いは、新採用の年の歓迎会でした。案内をいただき、期待半分不安半分、そんな思いで参加したことが昨日のことのように思い出されます。あれから三十六年、同窓の方々と会の活性化に向けて真剣に考えたり、酒を酌み交わすなど親睦を深めたりしてきたこと全てが素敵な思い出、財産となっています。会員が年々減少し、これからの会の運営は益々難しくなっていますが、会は「研修と親睦」の充実に向けて絆を深めていって欲しいと願っています。



「根室からの風」
根室支部
滝 泰英

昭和六十二年四月、根室市内の小学校に着任し、私の教員生活が始まりました。札幌市出身の私には「あまりにも遠い。五、六年で石狩か空知へ戻るんだ！」の思いを抱いてのスタートでした。

根室管内は、若手教員がとても多く、二十代で研修部長を経験し、日本全国の研究推進校の視察に何度も行かせていただき、三十代前半で教務主任を、三十九歳から管理職に昇任させていただきました。

そんな私でしたが、教員六年目、根室の女性と結婚し、「五、六年で戻るぞ！」の気持ちは、楽しく充実した教員生活の中で、「根室の子どもたちのために頑張ろう！」に変わっていききました。以来、根室市、別海町、中標津町、標津町、羅臼町と、根室管内全ての市町で勤務することができました。

根室市ではハリポッターの映画に登場しそうな真っ白なシロフクロウ、別海町では教員住宅の網戸にとまっていたたくさんのホタル、中標津町では学校の玄関前を滑空していたエゾモモンガ、標津町では年に一度の楽しみイクラ給食、羅臼町では

教員住宅の上で夜通し重低音を響かせ鳴っていたシマフクロウ（本当にやかましかった）など、どれもすてきな経験をすることができました。もちろん、おいしいものもたくさん堪能することもできました。

一方、根室支部では、楠瀬功先生、齋藤隆司先生、高橋昭先生など、たくさん先輩たちにお世話になりました。でも、会員数は私が事務局局長になった二十年ほど前には四十七名だったのが、今では十数名です。根室管内に赴任した若い青陵会員は、数年では管内へどんどん流出していくのが現状です。しかし、私たち根室支部では、異動した先で「根室から来た先生には力がある！」と思われるように、最東端から風を吹かせています。

三十七年間の教員生活を振り返ると、とても楽しく充実し、あつという間でした。これから根室の未来を担う若者や子どもたちが、この地でどんな夢を紡ぎ、どんなすてきな地域にしていってくれるのかを見るのを楽しみに根室管内で過ごしていきたいと考えております。

北海道青陵会並びに会員の皆様、これまでに出会った全ての皆様には、感謝しかありません。皆様、長い間ありがとうございます。



「もう少し」
オホーツク支部
岩瀬 知範

岩見沢校を卒業し、教員としてオ

ホーツクの地で三十五年たちました。オホーツク支部長も二年目を迎えております。私が青陵会に入った時には、管理職の先生方が十三人ほどいらつしやいました。多くの先生方のご指導を受け、今に至ります。他の支部も同じと聞きますが、会員の減少が激しく、現在管理職八名、一般会員七十名ほどです。少ないながらも連絡を取り合い、近況を報告し合っています。オホーツクの特徴としては、雄武小から知床ウトロ学校まで二百キロを優に超えています。なかなか大変なんです。

私が支部長として心掛けていることの一つに、人事異動の際に何かとお手伝いできないか、ということがあります。管内異動の際はもちろん、管外異動の時こそ何かしらお手伝いできないかと考えます。オホーツク出身の私としては地元に戻ってきたわけですが、岩見沢校卒業生の多くは、札幌や空知出身の方がたくさんいらつしやいます。「ゆくゆくは地元に戻りたい」という気持ちも十分わかります。そのためには、

希望の地への異動が叶うよう、他管内の青陵支部長の方々と連絡を取り合い、微力ながら異動のお手伝いできればと考えております。

さらに、今年は岩見沢校及び青陵会が一〇〇周年を迎えることは皆さんご存じのことと思います。たくさん卒業生を輩出し、教員に限らず様々な分野で活躍している方もたくさんいらつしやいます。そういった方ともつながることができると青陵会ももう少し発展するように感じます。一〇〇周年の記念行事には多くの方が集まることでしょう。そんな方々とそれぞれの大学時代を語るうち、駅前の焼き鳥屋、循環バスで移動、一律二百円のそば（ゲソ井もありました）、公園での新人歓迎コンパなどなど、懐かしい話をたくさんできたら楽しいだろうとワクワクしています。

いよいよ今年度で定年を迎え、新しい人生について考える時が来しました。正確にはプラス一年で定年となりますが、やってみたいことがあり、仕事はいったん区切りをつけるつもりです。来年の四月からはどんな生活を送っているのか今からとても楽しみにしています。あらためて青陵会および皆様のご発展、ご活躍をご祈念申し上げます。

平成元年四月、赴任地は後志管内の泊村でした。採用は小学校で受験して中学校、泊村は「原発」のイメージがありましたので、何となく不安な気持ちもありました。

赴任してみると、当時は新卒の先生は珍しかったようで、学校でも地域でも皆さん温かく接してくださり、大切にされているように感じました。生徒も真面目で落ち着いていたため、研修会に多く参加することができ、他校の良い実践を自校用にアレンジすることで自分の授業スタイルの基礎が身についたように感じます。身活動では、全道大会に出場経験のあるバレーボール部の顧問を任せられ、最初の頃は部活動の時間が最も楽しい時間になっていました。また、地域の人と交流する機会が多くあり、地元の女性と結婚し、親戚や知り合い、家族が増えた充実の八年間でした。

その後、教諭は三校を経験しました。自分は担任への思いが強かったので、管理職になるつもりはありませんでしたが、背中を押してくださいましたのは昨年ご逝去された青陵会の大先輩である巻校長先生でした。巻先生は、社会情勢や教育改革の変化、

先輩を訪ねて
～「出会い」と「つながり」～
豊田 一正氏



(外国語研究室 平成元年卒)

管理職としての心構えなど、多岐にわたりいろいろなことを丁寧にご教示いただき、管理職になってからも参考になることが多くありました。教頭は三校を経験しましたが、どの学校でもやや大きめの生徒指導があり、特に一校目では初期対応が遅れ、保護者対応で辛い時間が続きました。「先生に戻ろうかな」とも思いましたが、教職員と力を合わせ、粘り強く取り組んだ結果、理解を得ることができ、本当に良い経験や勉強になりました。

まだ教職は続きますが、振り返ると自分は職場や地域に良い「出会い」や「つながり」があり、「運が良いなあ」と思っています。さらに今年、一般時代に勤務した学校に赴任しました。苦しいことも嬉しいことも経験し、最も学びが多かった学校です。保護者になった当時の生徒と再会を果たすこともでき、おそらく最後の異動と考えると「運が良いなあ」と改めて感じます。

後輩の皆様は私のように「運」だと考えるのではなく、「出会い」や「つながり」を大切に、確実に上手に捉え、活躍されることを願っています。

学生活動支援事業

大学連携部長

江幡 佳代

大学連携部では、母校の発展や本学学生による芸術やスポーツ活動を通した地域貢献活動を支援するため、平成二十二年度から学生活動支援事業を実施し、今年度で十三年目を迎えます。また、幅広い支援を行えるよう、令和元年度から一般申請枠を新設しました。

昨年度まで新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、学生活動については見通しが持てないところもありました。今年度は、学生活動も制限がほぼなく行えますので、三年ぶりとなる対面での学生幹事会などを予定しております。感染症対策は講じつつ、計画に沿って今年度の事業を進めてまいります。

昨年度の本事業で支援した専攻二団体と一般枠一団体の活動の様子をご紹介します。

〈美術文化専攻〉

活動名「修了・卒業制作展」

岩見沢会場（まなみーる）と札幌会場（大丸藤井セントラルスカイホール）で制作展を開催しました。コロ

ナ禍の中、制作や研究を行い、自分の表現を追究した学生達の姿が表れた展覧会となり、美術の面白さや楽しさ、可能性を感じていただく貴重な機会となりました。

〈音楽文化専攻〉

活動名「定期演奏会」

昨年度も、授業の成果を発表する場として、岩見沢と札幌で定期演奏会を開催することが出来ました。学生が作曲した作品など、盛りだくさんのプログラムで観客に素晴らしい演奏を届けました。

〈一般枠〉

活動名「北教大岩見沢校YOSA KOI『迅』」

活動規制が緩和され、岩見沢や札幌のイベントを中心に、多くの演舞機会に恵まれました。学年や専攻の違いを超えたコミュニケーションをとりながら活動を進めています。市民をはじめ多くの方に感動と元気を与えています。

以上の活動に対し、昨年度、約二十五万円を支援しました。なお、原資は会員の皆様からいただいた基金への寄附で賄っております。会員の皆様のご理解と学生活動支援基金へのご寄附をお願いいたします。

編集後記

会報第一二号をお届けいたします。

今号からは、年一回の発行となっておりませんが、大学と青陵会の一〇〇周年記念式典に先駆けて発行したいという思惑があったため、執筆者の皆様には、新年度がスタートしてから間もない時期でのご依頼となってしまうかもしれません。お忙しい中にもかかわらず、玉稿をお寄せくださった皆様には、心より感謝申し上げます。お陰様を持ちまして、ほぼ計画通りに発行することができまことに、この上ない喜びを感じております。

なお、「退職支部長のメッセージ」のコーナーについては、役職定年を迎える方を対象に、ご寄稿の声をかけさせていただいており、次年度以降もそのようにしたいと考えておりますので、ご理解いただきたく思います。よろしくお申し込み申し上げます。

さて、一〇〇周年記念の式典当日まで、あと一か月余りとなり、いよいよ式典開催の機運が高まってまいりました。記念事業の公認ロゴも、岩見沢

北海道教育大学 岩見沢校100周年 地域と共に歩み、共につくる ~往古來今~



北海道教育大学岩見沢校・北海道教育大学青陵会

校の学生である、瀬尾涼音さん・朝日見帆さん・大塚里央奈さん三人の手により完成致しましたので、ここに紹介いたします。

ロゴマークには大きさや色の加工など、使用のルールがございますので、お使いになりたい方は、「創立一〇〇周年を祝う会」実行委員会総務部（岩見沢市立光陵中学校 0126-2210037）の藤田理事長までお問い合わせください。

《広報・情報発信担当》

・部長 林 宏和

・副部長 神島 亘基 (上砂川中学校) (豊沼小学校)

・副部長 渋谷 憲一 (妹背牛小学校)

・部員 一ノ瀬 健太郎 (三笠岡山小学校)

・部員 小野寺 英樹 (滝川江陵中学校)

・部員 沢 泰宏 (岩見沢第一小学校)

・部員 笠井 賢吾 (千歳緑小学校)